

卵の花

著者	柿花, [カキバナ]
雑誌名	龍南會雜誌
巻	1 7 0
ページ	1 9 - 3 8
発行年	1919-05-20
URL	http://hdl.handle.net/2298/6480

卯の花

二部二年 柿

花

「眞個に疲れた」

と妹が云ふ。ソフトの縁の蔭が耳朶の所までしか届かないので、四月初めの陽は、もう暑いと云ひ度い位に、右の頸筋の所を照してゐる、右手に提げた派出な女持ちの信玄袋が、膝上の横股に歩をかへる毎に、だるそうに當る。

「兄さん、そんなにしちや。亂暴ねね。先刻も云つたぢやありませんか。中には碎れると駄目な物が容れてあるつて」

「これつ位揺れても、好かんのか。一体何を、其麼大切な物容れて來たんだい」。

「行つたら出して見せますよ」

「今云つても好いちやないか。品物次第で用心の仕方が違ふからね」。

「拗拗いねね」

「拗拗いねね」

妹は微笑んだ。自分はこれで信玄袋の内容物を三度尋ねた。紅のバラソルを透いた日光の爲、妹の顔色が、少し黒ずんではゐるが、赤々と健康そうに見えた。實際妹は兄の自分に似げなく、仲々丈夫な體を有つてゐた。自分も思はず微笑んだ。

「滅法粹な傘を有つてゐるね。其麼物何時買つて貰つたい」。

「何時だつて好いちやありませんか」

「あまりよくもないね。傘が紅で衣物が、何だかべらべらしたぴか物で、おまけに紫色と來てるからね。

うつかりすると、埃及の御代知召すつてな緯名あだが附くよ」

「何とでも仰言い。でも其麼にけばけばしてるの」

妹は自分の何氣なく云つた冗談が、酷く氣になるらしく小さく紅い傘のドームを仰いで、瞻たり、袖の背の方を返して見たりした。

「でも顔が麥の粉のお化でないから感心だ」

妹は自分の顔を見た。然しその眸には何等の表情も無かつた。不思議だと自分は思ふ。只復例の兄の皮肉が始まつたから、今から沈黙だと云つた様な警戒の色が浮んでゐた。自分は疲れた妹を揶揄ふのが、常に似げなく氣の毒になつたので、それ以上何とも云はなかつた。

海近い川口には、もう潮の色が見えてゐた。渡守の子供が鱸板ごらいたの上で居眠りをしてゐた。向岸の河原には斑牛が四匹繋いであつた。左三匹は親牛で、真中のが臥してゐた。一番右のは犢で、まだ角も出てゐない様だ。その傍に村童が三人居る。何やら紙切れの様な物を結び附けた小竿を持つてゐる、一番大きなのが犢の背後からわあと叫ぶ。犢は繋ぎ材の周圍を出来る丈綱を引張つてくるくる廻り出す。残の二人は牛が自分の前に來ると、一寸尻込みする。それでも矢張り大きな子供に合はして、わいわい云つてゐる。ずつと右の方には娘の子が居た。手には草を束ねて持ち、顔は犢と子供達の方を向いてゐる。その足下にひよつこりと黒い丸

いものが現はれる。それがぐるりと廻ると、それは眞黒く陽に焼けた娘の子の顔であつた。その顔がすぐ上に立つてゐる娘を仰いでから、これも憤の方に向き直つた。それから、四匍ひになつて、その娘の體が現はれた。其處は窪みになつてゐるのらしい。男の子等は矢張り盛に憤に戯れてゐた。突然左の方に居た親牛の一匹がモウと鳴いた。子供等は立止つて一齊にその方を見た。そしてわあつと笑つた。やあいと云つた。然し親牛は二度と鳴かなかつた。尻尾を振り乍ら、立つてゐた一匹がゆるゆると臥した。櫓の音が聞えた。然し右にも左にも船は見えなかつた。右の方は河岸が繁みになつてゐる。自分と妹とは思はず立止つてゐるのだつた。

河岸の通から左へ折れると少しで山附になつてゐる。一町許行つた突當りに自分の内の別墅がある。中程迄來ると、左側にもう一構の別莊がある。其處の石垣から、散りかけた櫻が一本道の上に差蒐つてゐる。その根方にすうつと卯の木が繁つてゐる。

「もう卯の花が咲いてゐますね。御覽なさい」

「うん咲いてるね。氣が附かなかつた」

「氣が附かなかつたつて余程野暮ね。人には、よく不風流だなんて云つてらつしやる癖に」

「たつた、二つ三つ位だからつい氣がつかかなかつた」

「二つ三つでも」

その裡に二人はその下を過ぎた。生暖い風が後方からふうつと吹いた。櫻の花片がちらちらと鼻の先を飛んで行く。東風だなおと古めかしい事でも思ひ出した様な氣分にそう思ふ。と何時だつたか、人から西風と書

いて何と讀むかと問はれた事のあるのを想起した。人の姓だと云ふ眞逆まさか「にしかせ」と讀ませる心算でもあるまいからと考へたので、「そうですね。解かりませぬ」と云ふと、「あち」だと云ふ、そして、そう云つた本人も自分も吹き出した、然し自分は、何かで西風を古語讀みに「あち」と讀ませてあつたのを見た様な氣もした。けれども、それも駄洒落だつたのだらうと今打消してゐると肩に何か當つたものがあるので思はず振返る。妹が莞爾して、

「花片が附いたから取つたの」

「莫迦な。それだから、不風流だと云ふんだ」

「いね、そうぢやないの、兄さん杯の様な不風流な人に花片など着せて置くのは勿体ないから」

「おやおや偉い理屈を覺けたもんだね」

と云つた機みに一寸上を向くと、今過ぎた石垣の上に卯の花から上半身を露はした女が瞰下してゐる。自分は四五日前から此地へ來て、少くとも日に一度は此の女に逢ふのに、挨拶位は御互に取換す程になつてゐたのである。それで今度も、自分は何の氣もなく笑を含んで、會釋爲やうとしたが、不思議にも相手の眸は爛々と輝いて會釋爲やうともしなかつた。自分は狼狽した。何だか、見てならない物を見て、侮辱でもされた様な、嫌な氣持がして、理由わけの解らぬ不満と憤懣ふんげんとが起つた。その裡に妹も、其の女に氣が附いた。然し、何も知らぬ妹には何も解からう筈は無かつた。又妹に判わかつてゐて貰はねばならぬ程の筈でも無かつた。

「兄さん、あの方、此の家の御方」

向き直つて歩き出した時、妹は恙さへう尋ねた。自分は點頭うなづいた。復風が吹いて花が散つた。彼の女の上にも花

が散つたらう、然し可笑しな女だ。今朝逢つた時も丁寧^{ていねい}に挨拶して、何の彼のと聞いたりなどした者が、遊びに來いと案内まで云ふ様であり乍ら、可笑しい。今になつたら睨^{にら}み附けたりなどする。そうだひよつとしたらヒステリーかもしれないぬ。と思ふと、彼の瓜核形^{うりざねなり}の顔が頭に浮んで頬の締り工合から、幾分薄つべら高い鼻、それから長く切れた狐の様な皆、それに雫眼^{しずめ}、どう見てもヒステリー患者の様に思はれる。そう思ふと今見た時も、肩がビリリと痙攣^{けいれん}した様だ。あれも、並^{なら}の者の眉の動き方とは異つてゐた。彼此れど、考へ合せて見ると、愈々ヒステリー症に罹^{かか}つた者と斷定を下さねばならぬ様になる。又實際そうなんだらう。それだから療養の爲、春半の好時候に、まだ避暑でもあるまい、此の海岸にやつて來てゐるのに違ひない。面白い、ヒステリーだつたら頭休めの慰みに、話對手にして遣らう。然し自分杯の話相手としては、代物が代物だけに何だか劍呑^{けんどん}だ。危^{あぶ}なつかしい。妙齡^{せうれい}で何方かと云へば美貌、實際自分杯の話相手や何かにすべきものではない。然し自分の妹と何方が綺麗だらう。妹は彼の女に較べたら少し鼻が低い様だ。然しその代りに目が丸くて、豊頬とあるかないかの笑窪^{えんくわ}とに彼の女には覺め得られぬ愛嬌がある。顔色此れは什うも判り兼ねる。勿論化粧は彼の女の方が上手の様だ。然し要するに、それは彼の女が麥の粉顔だと云ふ事に歸着する。怎麼事を比較して考へ乍ら、自分の顔は、自然と並んで歩いてゐる妹の横顔の方へ向いた。そして、「うん」と云ふ音^{おん}が、自分を裏切つて、思はず唇から出た。途端に妹の愛くるしい顔が此方に向いた妹の眼が「おや」と云つた。自分の眼は「はつ」としたらう。

「さまの悪い。人の顔をまじまじ見て、兄さんは」

と妹が責める様に云つた。自分は少からず狼狽した。咄嗟の場合、自分は只「は、」と笑消すより外に辯解

するだけの事も出来なかつた。そして自分は今少しの間にもうこれで二度狼狽したと思ふと、自己の威厳を墮した様な氣がして何だか苛らだたしかつた。

自分の下駄が、春風に乾いた道に引摺られて、からからと鳴る。妹の空氣草履の音がばたばたと云ふ。矢張り春は長閑かだと心の中で聲がする。然しお前の春はあまり長閑でもあるまい、つい今しがたどぎまぎしたぢやないかと他の聲が云ふ。そんな呑氣な事を言つたり考へたりするとの出来る様な氣分になれるから春は長閑なんだらうと一番大きな聲が言ふ。

「實際春は長閑だ」

鶯が啼く。

「まあ鶯が啼く。矢張り此方は街より好いね」

と妹が云ふ。霞で洗つて花の香で^な廻り上げた様な聲で啼く。彼の美しい毛色の體を逆にして、頸と尾羽をちよいちよい動かし乍ら、啼いては移り、移つては啼いて、木の枝の間を飛び廻つてゐるのだらう。鶯の聲は矢張り最も春に適してゐる様だ。然し初夏かけて、明るい光線を受けた谷間の^{たに}若葉の中で啼く、春を惜む様な調へも逆も自分には棄てられぬ趣がある。

「實際春は長閑だ」

と自分は低音で再び呟いた。そして長閑な氣分に心の髓まで、薰つて、解け込む様に感せずにはゐられなかつた。高い春の移り香が、胸の底まで届いてゐる様に感せられた。

「おい一寸海岸に散歩に行くが一緒に来ないかい」

夕食は済したが日はまだ高く残つてゐた。妹は疲れたから今日はもう散歩は止すと云つた。自分は例の如くやり所の無い手を懷に差込んで、ふらりと家を出た。冠木門^{かぶきもん}を潜ると、前は、直ぐ石段になつてゐる。一段二段と下り乍ら、自分は石段を數へた。九つあつた。何處にも櫻の落花が、まだ色香を穢^{けが}れされずに散らばつてゐる。俺の所にも櫻があつたと呟き乍ら振仰ぐと、石垣から外へ突出てゐる卯の木の群がある。ああ卯の木も有つたなと思つたらふつと、その上に女の顔が浮んだ様な氣がした自分は、何の意味もなく「はは」と笑つた。笑つて仕舞つた自分は、誰か見て居やしなかつたらうかと思つて、あたりを見廻したが幸に人は居なかつたので安心した。卯の木の上に浮んだ様に思はれた女の顔も全く、幻影に過ぎなかつたらう。自分の感情が妙に詰らなさそうに否定した。然し、その否定の仕方が強きに過ぎた爲か、反抗的な空想分子がいや實際女の顔が見えたと呟く。も一度見て見よと云ふ。すると先の感情が意地になつて、見てはならぬと禁ずる。

厭に石の凸凹した道である。先刻も通つた、それらの石の間には莖がある。小さくいぢけて、花は、黒味を帯ぶる位濃い紫色だつた。紫、妹の衣物の地色が紫だと思ふと今度は何とはなしに先刻の女の事が想ひ出された。卯叢の上から此方を視た、あの異様な眼の光の意味が解せない。矢張りヒステリー症なのだらうと先刻と同じ事を考へ乍ら自分は今丁度その屋敷の下を通つてゐる。心の中のデカタンが覗けと命する。右の手が懷を去つて袖から出るとそれが右側の石垣の上縁に掛る。爪立つて覗くと、卯の木の根元の透間から、座敷が見える、南から西に廻つた縁、その角の柱の根に、ヒヤシンスの鉢が置いてある。白い花の穂が見え

る。西側から日光が黄味を帯びて、長く、座敷の中へ差し込んでゐる。中硝子の四枚障子が兩開きにしてあるので、眞向きの次の部屋との仕切りらしい襖の、裾薄に渲した地が判然見ゆる。薄墨で描いた蘆と水とが見ゆる。雁は見えない。その右の方に半分障子に隠れて衣桁がある。朱塗の色が美しい。何も掛けて無い様だ。硝子を透いて見ると長編絆らしい派手な模様の物が一つ引掛けてあるのが見ゆる。床の間は硝子越しに見てはゐるが斜だからよくは見えない。只青莪が何か活花してあるのが少し見ゆる。多分例の女が活けたのだらう。その傍に違ひ棚が三分の一程見ゆる。和綴の本の脊が見ゆる。何も容れてない花籠がある。誰も居ない座敷の中は森閑としてゐる。人懷つこい氣分が充ち満ちてる様に思はれる。

唇の邊が冷つとして、急に土の臭ひが鼻に衝いた。自分の顔は石垣に摺れ摺れに接近してゐて、其處に生じてゐた嫁菜の葉が唇に觸れてゐた。泥の附いた指先を弾き乍ら、復ぶらぶらと歩き出す。落暉の光を正面に浴びてゐる彎入した山の懷では、鶯が頻りと啼いてゐる。

千里鶯啼綠映紅 水村山郭酒旗風

微吟して行くと、無い風に操られて櫻の花が一片、ひらひらと舞ひ乍ら散つて来る。そして、靜に靜に土の上に納まる。口には吟じ乍ら、心の中では「はあ、あの櫻だなあ」と何とはなしに悠う思ふ。

一町位の道程は何でもなかつた。直ぐ先刻の河岸に出た。それを左へ行くと、道と河とが一緒に、大きく左へ曲つて、それから三町程行けば、もう海である。海岸の道は山に傍つてゐる。夕風の海面には、愈々傾いた落日の影がとろとろと流れてゐる。それが歸船の莖帆に當つて、赤色を帯びた黄色に燃ゆる。

春の海日ねもすのたりのたり哉

新らし氣に、改めて共鳴した感じを唖られる。二町程手前からは、もう引汐の波の音が聞えてゐる。河の流れは急になつた様に見えた。何時しか日は背後から差す。自分の影が長く長く前に落つる。右の足を出して左の足の影を踏んで見る。踏んで見てから馬鹿馬鹿しい心持がした。それでも次には、もう自然に、左の足が右の足の影を踏む。そうして、足取が次第に千鳥になつたら、何だか面白くなつたので、拍子を取つて一つ置きに影を踏んでゐると、遂に小走りになつた。足取が段々速まつて行くと、到頭股の邊が、硬ばる様になつて、胸と脊のあたりがぼうつと汗ばむ様になつた。一番最後に千鳥に踏んだ足——それだから一番最後になつたのだらうが——が礫の上に乗つて、足首をいやと云ふ程捏ねた。左方に當る東部の水平線のあたりは、もう紫色の海上の靄が立罩めて、眞向ふに在る島は、鼠淺黄の薄絹に包まれた様に、その輪劃を柔らめて來た。

もう足下では、時を切つて、磯波の音がザーツ、ザーツと鳴つてゐる。少し行くと、道の右側から緩やかな斜面になつて、目の細い眞砂子地續きである。それを五間下ると、其處には幾千尋の神秘の海底に通ふ暗綠色の潮が生有る物の如くに蜿つてゐる。自分の兩手には、何時の間にか下駄が片々宛握られて、衣物の裾は端折られて、その前襟が帶の間に挿まれてゐた。一踏毎に、素足が蹠に氣持の好い冷たさを感じ乍ら、三分程濡砂の中にめり込む。五秒置きに寄せる波が舐める様に足の甲の上を越して、足頸の所を洗つて、引退くと、後に残した足跡は、大抵一回で消えて仕舞つた。時々は少し強く來る波があつて、それが足頸に當ると白い細い沫がばつと立つて膝の上迄濕りを覺ゆる。寄せたり、引いたりする波間に、先刻から、黒ずんだ木切れが一つ揉まれてゐる。岩が有る。自分の毎度行つて靠れる岩が在る。自分は、何氣なくその岩の横を廻

つて、背後に出ると、人が居た。「女だ」と自分は見る前に直覺した。女だつた。それは彼の別荘に來てゐる令嬢だつた。ヒステリーだと思ふ女だつた。落花、卯の花と直ぐ聯想する。然し彼の女は未だ、自分が來た事を知らぬらしかつた。自分は引返さうと思つた。然しそれでは何だか呆氣ない心地がして、折角捕へた獲物を放つ様な感じがして、一寸逡巡した。彼の女の手にはスケッチブックがある。鉛筆がその上を這つてゐる。俯向いてゐた顔が徐に上つて、霧の中を見込む様に沖を視凝めた。その眼が顔がすうつと左の方へ動いて來る。遂にその眼が自分の像を射入するに充分な角度迄に廻轉した時顔は突然此方に向いた。下脛がきりつと引締つて、雉眼が莞爾した。それから顔は猶此方に面した儘胸から上が軽く傾いた。お辭儀である。自分も應へた。

「まあ。何時から來てゐらつしたんですか。先刻から」

スケッチブックは閉ぢられた。鉛筆は布表紙の端の革の輪に差された。

「お止めになつちや好けません。お描きなさい。僕あ失敬しますから」

と云ひ乍ら、人の感興を破つた様に感じた。自分は濟まない事でも爲た様な氣分で後返り仕様とした。

「いね。もう描きませんの。ほんの氣慰みですから、描いたつて、描かんかつたつて好いんですから」

「はは」

と自分は有耶無耶な返事とも何とも付かぬことを云つた。何だか不見識な言葉を發したものだと思つた。心の中で自分を蔑んだ。そして、同時に、此の女はよくべちやべちや喋舌る女だと思つた。

「大變うまい様ですね。一寸見せて呉れませんか」。

それでも何か相槌^{あひづち}して、壓潰^{おさつぶ}された自分の鼻先を盛返す心算で恚^{いら}う云つた。

「でもあんまり下手でムいますもの」

と答へたので、では拒絶するかと思ふと、差出した自分の手へスケッチブックを渡した。自分は何だか張合ひが抜けた様で、それでも、そのブックを受取ると一枚一枚丁寧に繰つて見た。皆淡彩にしてある。筆の運び方には可成巧者な所も見わたが、構圖は、未だ幼稚な素人の域を脱して居なかつた。蔭色^{かげ}に紫を多く使つたのが眼に付いた。要するに彼女が自ら云つた手慰みと云ふのは事實らしかつた。

「好^{うま}い」

然し自分の口からは、無意識に此の言葉が洩れた。でも自分の心には、何等感じた所も無かつた。至極平穩無事だつた。此の言葉は、只有觸れた、他人に對する禮と云ふことに由來する、御世辭に過ぎなかつた。

「突然ですが先刻の綺麗な御嬢様。彼の方は何方^{どなた}でゐらつしやいます」

おやおや無遠慮な、妙な質問を發する女だと、自分は思つて先づ、應へる前に、一度彼の女の顔を見た。視線がぱつたり合つたら向ふでは非常に狼狽^{うろた}して

「いね、私も一人で淋しいんですから、何うか御友達にして頂きたいと思ひまして」

と口早に云つた。自分は、彼の女の意味がどうも薩張りとは解らなかつた。何も知らぬ赤の他人に引摺まつて、迷路をぐるぐる引廻はされて、「私はこれで失禮します。どうぞ惡しからず」と挨拶された様な心持がした。鳩に豆鐵砲と云ふ氣もした。

「はあ妹ですが」

やつと今になつて、自分は斯う云つた。

「まあそうですか。失禮致しました。お妹さんですか」

此言葉なら、自分にもどうやら解つた。然し何だか解らない所がある、妹だからつて、其座に仰山に驚く必要も無からうにと思ふと愈々解せぬ。解せぬと復此の女はヒステリーだと思ふ。太陽は落ちて餘光が射る様に天に擴がつてゐる。自分は彼女の顔を見た。西に背を向けた彼女の女顔には靄に裏まれて、渾然と太陽の光を反射してゐる雲の反射光線がやんわりと流れてゐた。そして鼻や、頬や、まなじり 皆も、晝間思つた程神經質にも見へなかつた。却つて、何處かに、ふくよかな温情が潜んでゐる様に思はれた。

黒い鳥が眼の前を飛んで行つた。波は、もうすうと遠くへ退いてゐた。直ぐ前を、帆を却した船が滑らかな水面を這つてゐる。艚の音がする。疑乃うなづたがそれに絡まつて聞えて来る。

欸乃一聲紫烟裏

と思はず呟いた。そして、下手なもちりだと思ふ。

「ね、何ですか」

「は、何でもありません。結構でした。有難う」

自分は不圖氣が附いて、スケッチブックを彼の女に返して下に置いてゐた下駄を取揚げると、汀の方へ進んで行つた。

自分が足を洗ふ間、彼女は岩角に立つて、此方を見てゐた。もうその邊も薄暗くなつて、寄せては泡立つ波の穂が、白く見えた。風が出た。陸から海へ吹く。そよ／＼と吹く。彼女の衣物の裾がひら／＼と靡いて、

赤の混つた長繻袴の裾が、鶉色の袴の裏と、縫れる。振袖が風を孕んで膨れる、鬢の毛がほつれて、白い頬に流れる。額が少し光つて見ゆる。先細りの指が額に當てられる。それが右へ迂る。鬢のはつれ毛が撫でつけられる。撫でつけられた毛が復直ぐはつれて頬へ靡く。自分は足を洗ひ終ると、立つた儘、暫、彼の女を視詰めた。唇が動いて白い齒が顯はれた。と不圖彼の女は、あれでも生き物だと思ふ。生きてゐる。魂がある。情がある。智がある。飯を食ふと思ふと今迄神聖化され、藝術化されてゐた自分の觀賞が、急に現實の版圖に投げ込まれて、厭やな氣が差した。自分は元來た方へ斜に砂濱を横切つて、すたすたと歩き出した。

「お待ちなさい」

と彼女が云つた。バタバタと履物の音がする。それでも自分は背も向かなかつた。勿論立停りはしなかつた。聽て道に上つた時、彼の女は自分に迫附いた。はあはあと云ふ荒い息使ひが聞ゆる。

「足がお速いことね」

その句調は嫌に狙れ狙れしかつた。自分は黙つて彼女を見返つた。重苦しい氣分が胸を厭して堪らなく息が迫る。自分は思ひ切つて太い吐息をした。それが彼女に聞わたのだらう。

「どうかなすつて」

と彼女が訊ねる。自分は矢張り黙してゐた。彼女はずつと接近した。高い香水の香りが、自分の體全体を引包んだ様に思はれる程強く、嗅覺を感じしめた。袖のひらひらするのが自分の手に觸れた。自分は重苦しい氣分が愈々堪へられなくなつて足を速めた。彼女も急いだ。向ふから人が来る。自分は、つと横へそれた。今度は彼女は寄つて來なかつた。頓て向ふから來た人は、自分等の間を通り抜けて、その行き摺りに、振返

つて自分等の顔を見較べてゐた。黒く焼けたその顔に、白眼が著しく白く見えて凄味があつた。手には魚籠を提げてゐる。體一面から湧き出る様な、臭氣がぶうと臭つた。殊に項うなじから肩へだらしく崩れ掛つた蓬の様な髪毛からは、日に焼けた咽のどせる様な臭ひが流れて來た。それは、二三度逢つた事のある海女だつた。その女が通過ぎて仕舞ふと復彼の女が、寄つて來る。今度は前よりも更に近く寄添つて來る。到頭互の手と手とが觸れた。自分は物怯ものおそわした様に手を引いた。彼の女は、自分の顔を見て、につと氣味悪く笑つた。自分は甫まづめて謎が解けた。卯の花の上の眼附、岩蔭の質問と狼狽、讀み得た自分は、恐怖の混まじつた嫌惡の念が、むらむらと湧いて、益々足を速めた。それでも彼女は小走りし乍ら尾いて來る。そして始終接觸仕様とするくつつかうとする時、自分が、つと離れると、その度に彼の女の口から「ひひ」と云ふ異様な笑聲が聞ける。自分は到頭耐へ兼ねて驅け出した。然し暗くなつて、人絶ひととわのした、山傍ひで海岸の道を、女一人歸らせるのが、何となく心許なかつたので、道が曲つてゐる所で、立止つて待合はした。彼の女は俯うつむ向いた儘、別に急ぎもしないで來る。近づくのを見ると、しくしく泣いてゐる。自分は復妙な氣分に襲はれた。待合はしてゐる自分の處へ來ると、彼の女はお辭儀をして、

「失禮致しました」

と聞取れない位の小聲で云つた、それから暫くは、彼の女は、黙つた儘溫和しく、自分に尾いて來た。俯うつむ向き勝な彼の女の眼からは、涙が流れてゐる様だつた。河岸通から右へ這入つた時、

「學校は何方へゐらつしやいます」

と、彼の女は、藪から棒に、斯う問を發した、然しその態度その言葉附、その表情さへも、今は、もう何の

異つた所もない常の平靜に還つてゐた。それに反して、先刻の動搖した心理状態から、未だ全くは平常の靜穩な心理状態に還つてゐなかつた自分は、

「はは」

と笑つた、そして、その聲に自らぎよつとした。笑ひも、何の實もない様な笑で、頬の肉が、嫌やに硬はばつてゐるのを感じた。白らけた感じが心を満たしてゐた。彼の女はその別荘の門前に來た時、

「どうぞお暇の折は、お妹さんと、御一緒に、遊びにゐらして下さいまし」

と云つて、御辭儀をした。それでも先刻は彼麼氣まぐれになつてゐたのだと思ふと、可笑しさも通り過ぎて不惑な様な心地がした。

石垣の下を通る時、座敷には灯ひが燈ともされてゐて、未だ、一度も聞いた事の無い女の話聲がしてゐた。自分はやつと、胸の上に載せられてゐた重しを取去られた様な氣分がした。月白つきしろだらう、山の嶺が黒く判然と、際立つて見えた。内の石段を上る時、花片が一つ頬に掛つて、それから胸を傳つて帶の處で止つた。

春宵一刻值千金 花有清香月有陰

歌管樓臺聲細細 鞦韆院落夜沈沈

吟じ了る頃自分は座敷の縁に腰掛けて、側に居た妹の前に置いて在つた、西洋皿を引寄せて、中のシウクリームを一つ撮んだ。

「甘い」

「海岸はどうでしたの」

「うむ。好かつた」

遠い向ふに灯が見えた。その上の空には、まだ夕の微光が残つてゐた。去來だつたか、「卯の花の絶間叩かん暗の門。」庭先にはの白く見ゆるは卯の花。夕闇に、花ある宿と門敲く風雅の友も無い様だ。只狂亂の女性（によう）が、頭の中の繪に入つて來た。現實から、實體を取除けて苦味（にがみ）を去つたら繪になると誰かが云つた。有情無情は、人の幸、不幸の分るゝ所か。

朝は清らかだつた。然し秋のその様に澄徹し切つた清らかさではなかつた。飽くまで、春らしい艶冶な姿を脱しなかつた。例へば、秋が金剛石の様な清らかさだつたら、春の清らかさは眞珠のそれであつた。此方へ來てから、這の自分も、少し風起（はやおき）するので、今朝妹が笑つた。天氣がしげなれや好いが坏擲揃つた。毎朝の例に依つて紅茶を一杯啜ると散歩に出た。妹を無理に誘つて二人で昨夕も自分が行つた海岸へ行つた。まだ陽が昇らぬ爲、一面の霞に波や鳥影は、ふつくらと包まつてゐる、今朝は千鳥の鳴く聲が聞える。

聽て、後の山で鳥が鳴く。河口から船が下つて來る。遅い男が二人で「あつさあつさ」と帆を揚げてゐる。傳馬（でんま）が親船の残して行く波で揺れる。自分達の前を斜め向ふへ過ぐる時、帆は凡方（あらかた）揚がつて仕舞つた。ど、その帆の上端が銀色に輝く。山によつて投げられる陰影の線と、太陽の光線とが判然區別されて、霞の色が華やかに變つてゐる。又船が來る。帆は揚げてゐない。艫の處に子供が立つてゐる。その父親らしいのが半裸體になつて、長い櫓を操つてゐる。手と上體とが拍子よく、緩やかに揺くと、船は滑らかに進んで行く。

二人は例の岩かげに來てばんやりして立つて居る。妹は朝日の光に瞬時々に色を變へて、そして次第に消

「うむ。好かつた」

遠い向ふに灯が見えた。その上の空には、まだ夕の微光が残つてゐた。去來だつたか、「卯の花の絶間叩かん暗の門。」庭先にはの白く見ゆるは卯の花。夕闇に、花ある宿と門敲く風雅の友も無い様だ。只狂亂の女性にようきが、頭の中の繪に入つて來た。現實から、實體を取除けて苦味にがみを去つたら繪になると誰かが云つた。有情無情は、人の幸、不幸の分るゝ所か。

朝は清らかだつた。然し秋のその様に澄澈し切つた清らかさではなかつた。飽くまで、春らしい艶冶な姿を脱しなかつた。例へば、秋が金剛石の様な清らかさだつたら、春の清らかさは眞珠のそれであつた。此方へ來てから、道の自分も、少し風起はるかぜするので、今朝妹が笑つた。天氣がしげなれや好いが坏擲掄つた。毎朝の例に依つて紅茶を一杯啜ると散歩に出た。妹を無理に誘つて二人で昨夕も自分が行つた海岸へ行つた。まだ陽が昇らぬ爲、一面の霞に波や鳥影は、ふつくらと包まつてゐる、今朝は千鳥の鳴く聲が聞える。

聽て、後の山で鳥が鳴く。河口から船が下つて來る。逞しい男が二人で「ゑつさゑつさ」と帆を揚げてゐる。傳馬てんばが親船の殘して行く波で搖れる。自分達の前を斜め向ふへ過ぐる時、帆は凡方揚がつて仕舞つた。と、その帆の上端が銀色に輝く。山によつて投げられる陰影の線と、太陽の光線とが判然區別されて、霞の色が華やかに變つてゐる。又船が來る。帆は揚げてゐない。艫の處に子供が立つてゐる。その父親らしいのが半裸體になつて、長い櫓を操つてゐる。手と上體とが拍子よく、緩やかに揺くと、船は滑らかに進んで行く。

二人は例の岩かげに來てばんやりして立つて居る。妹は朝日の光に瞬時々に色を變へて、そして次第に消

わて行く霞の中を見込む様に、珍し相に視凝めてゐる。自分は昨日の事を思ひ出して、頭の中で復寸分違はぬ筋を辿つて見た。然し今朝考へると、それは氣持の好い幻影の様に考へられた。そして遂に自分がその幻影から脱け出して、靜に、縋れ行く、男女の姿を薄闇の中に、客觀的に透し見てゐる様な氣がした。

「凡べてが心地好い朝だ」

と自分は呟いた。妹は未だ沖を見てゐる。日影は、もう自分達の頭に及んだ。

「美代ちゃん、腹が減つた。歸らう」

「歸りませう」

「歸りませう」と應へ乍ら見向きもしない妹は、何時迄も平和な海の景色を慕つてゐるのである。

「歸らう」

と催促した時やつと、岩から降りて來た。綺麗な砂濱には、千鳥の足跡が有つた。彼の赤い小さい足で蹈んだ跡なんだらう。

「兄さん、千鳥の足跡が怎麼にすうつと續いてゐますね」

「千鳥の足跡が美代ちゃんには文字に見ゐるかい」

「何故其麼可笑しな事訊くの」

「何故でも好いさ。見ゐるかい、見ないかい」

「千鳥の足跡は、千鳥の足跡よ」

「そうかい」

「可笑しいね」

幾千年昔の人が、千鳥の足跡を見て、文字を考へ出したと云ふ傳説を妹は知らんのだらう。

「お前には、その衣物の方が、昨日着てゐた、あの紫のより似合ふよ」

「そう、それぢやなる丈、此の方を着ませう」

「そして、その方が温和しい」

實際黒茶地に藍の遠間縞が入つて、眼立たぬ紋の散らしてあるのが、妹には、温和しくつて似合つた。

自分の足が速い爲か、二人の間は次第に離れた。それで自分は今朝も曲り角の所で妹を待つた。妹は自分の顔を見て笑つた。自分も、何とはなしに笑つた。然し自分の笑は、妹の無邪氣な笑ひ程單純な笑ひではなかつた。昨夕も此の角で、女を待つたと思ふ心から出て來る笑ひが三分の二の勢力を占めた笑ひだつた。そして、自分の妹は温和しい。彼の女はヒステリーだと思つた。

石の凸凹の多い路で、彼の女に逢つた。然し今日は、向ふも一人ではなかつた。四十恰好の、品の好い婦人の伴れが有つた。母親だと、直ぐ判斷した。昨夕の聲の主も、此の人だと解かつた。

「お早う御座います」

淑かに、含羞んで挨拶する容子は、どう見てもヒステリーだとは見えなかつた。矢張りさる高家の令嬢らしく見えた。それでは、正氣の人なのだらうかしら。

「阿母様、此の御方が、彼方の別荘の御方であらうしやいますの」

「まあ、そうであらうしやいますか、私はこれの母で御座いますが、娘が何時も御世話様になります様子

で。はあ、いわ、どう致しまして、もう本當に我儘者で、何方様にも、嘸失禮斗り申上げる事だらうと存じまして。まあ、お妹御様で、昨日から、へね。私も昨晚から参りましたので。此の娘が少し病氣が御座いますので、獨りで遣つて置きますのが、心細う御座いますね。それで参りました様なわけですね。どうか御心安に御願ひ致します。穢い所で御座いますけれど、御遊びに、ゐらつして下さいまし」此の婦人は交際家だとは、世舛れぬ自分にも直ぐ、それと解かつた。「此の娘に病氣が有る」すると矢張りそのうのだらう、と斯う、自分は獨りで斷定した。それで安心した。でも可愛相に年頃に詰らぬ病氣に罹つて仕舞つて、親達の心の中にも不憫だ。二人は今しがた、自分達が行つて來た海岸へ行くのだらう。彼處へ行つたら、彼女は、昨夕の事を何麼風に回想するだらう。

「卯の花の數が増^ふねる様ね」

「間もなく春も初夏になるだらうよ」

「春も好いけど、初夏も好いわね」

昨日の様に鶯が啼く。然し、妹はそれを何とも云はなかつた。

「兄さん彼の御嬢さん、御病氣だつて、お氣の毒ね。妾今見た時、何だかヒステリーぢやないかと思つてよ」

「どうしてヒステリーだと思つたの」

「どうしてつて、眼の色から、御顔の容子や、物の云ひ鹽梅やなど、どうも變で何だかそうではないか知らと思はれたの」

「兄さんも、そうかも知れんと思つたよ」

女には、女の觀察眼が有る。敏いものだと感心した。和春の海岸に、養生に來てゐる、ヒステリー症の若い女。詩にも、歌にもなるかも知れぬけれど、自分には其麼能は無い只昨夕の出來事が復今度は、一種滑稽味を帯びて、頭に浮んだ。

鶯が頻りに啼く。春は悠久にして限りが無い様な氣がした。無限春風恨未消。散殘りの櫻が風に散つた。

(大正八年四月)

鏡の前で

文科 富田宗一

それも恰ど若葉の繁つた此頃のことだつたちやありませぬか、庭の青葉が廊下の板にうつすりと映つてすが／＼しい朝の光を浴びながら、あなたが鏡臺を縁に持ち出して、さうして、驚きましたね、あのあなたの漆のやうな潤澤な髪の毛を染めてゐらつしやつたのぢやありませぬか、あなたも随分吃驚したと見て顔の色がすつかりなくなりましたね、軽い浴衣だつたと思つて居りますが、その上に細い腰帶を巻き付けて余念なく鏡臺に向つてゐらつしたその可愛い姿がすつくと立ち上つて、朝日を横に受けながら蒼々と茂つた芝蘭の前に浮き出たやうに、此方向き直つた時には、あなたの顔に異様な緊張がありましたね、その上に何うしたと云ふのですか、今迄念入れて梳つてあつたその髪の毛をさも倦き／＼したと云ふ風に後に投げやつた。